

# 大正末期の海軍士官が見た海洋少年団

圓入 智仁

## Evaluation of Sea Scouts by Naval Officers at the End of the Taisho Era

Tomohito Ennyu

(2011年11月25日受理)

### 1. はじめに

1925（大正14）年8月2日から12日にかけて、東京海洋少年団（1924年12月発足）の指導者と団員が海軍の特務艦高崎に便乗して、京都の舞鶴から福岡の西戸崎を経由して神奈川の横須賀まで航海した。資料的な裏付けには乏しいが、ここには神戸海洋少年団（1925年6月発足）の団員も参加していたようである。その後、9月5日に横須賀鎮守府参謀長が海軍省軍務局長に宛てて、高崎に乗り組んでいた士官による海洋少年団員の便乗に関する所見を提出した。

本稿の関心は、この所見の中で海洋少年団がどの様に報告されているのかにある。海洋少年団の組織や活動に対する考え、海軍の艦船への便乗に関する考え、海洋少年団の組織や活動に対する提案、海洋少年団から海軍への接続に関する提案に着目して、現役の海軍士官による所見を検討したい。

本稿は、戦前の子どもの組織である少年団に対する、海軍現役士官による評価を考察するものである。戦前の少年団に関しては、田中治彦らによる一連の研究結果、あるいは圓入智仁による海洋少年団に特化した研究結果がある<sup>1)</sup>。これらの研究結果によると、1920年代から30年代にかけて、少年団の指導者としての登録はしていないものの、現役の軍人が全国規模のキャンプに施設準備や医療の面で支援するなど少年団の活動に関わりを持つことがあった。海軍に関しては、少年団日本連盟傘下の海洋少年団が、海軍に係る施設や設備を活動に利用していた事実が多く確認されている。それは本稿でも扱う海軍の艦船への便乗であり、海軍の所有する物資の払い下げであり、海洋少年団における全国規模の集会の会場として海軍兵学校を使用する場合もあった。

この頃、海軍の側から海洋少年団に対する積極的な関与はほとんどなかった<sup>2)</sup>。例えば、1934（昭和9）年に海洋少年団員が練習船によって東南アジアを一周航海する企画を、少年団日本連盟が海軍に提示した際、海軍は金銭面を含めた物質的な援助はしないと伝えている<sup>3)</sup>。その後、東南アジア一周航海の成功に加え、斉藤実と竹下勇という2人の海軍大將が少年団の全国組織の総長に着任したことなどが影響して、1938（昭和13）年に全国の海洋少年団が少年団の全国組織から独立する。その前後から、海軍は海洋少年団に積極的に関与をし始めるようになる。海洋少年団の組織に海軍が人材を送り出し、その教育内容も軍事色の濃いものになるのである。

このような海軍と海洋少年団の関係を念頭にすると、1925（大正14）年の時点で、海軍が自ら海洋少年団に関する海軍士官の所見を聴取していた事実は看過できない。1924（大正13）年末に結成された海洋少年団の活動に、海軍が僅かかもしれないが関心を持っていたことの証といえるからである。

本稿で扱う史料が興味深いのは、海洋少年団に関する所見を海軍がとりまとめ、それを海軍が内部書類として扱っており、少年団側に渡っていないと考えられる点である。戦前の海洋少年団の歴史において、海洋少年団からの何らかの依頼に関する書類ではなく、海軍が独自に海洋少年団の動向に関する情報を積極的に集めた形跡は、この史料以外にはない。つまり、この史料には大正末期に設立された直後の海洋少年団に対する海軍士官による捉え方が示されているのである。本稿によって、戦前の海軍が子どもに向けていたまなざしの一端を明らかにすることができると考えている。

高崎に乗り組み、海洋少年団に関する所見を報告したのは、中島武海軍大尉（海軍兵学校第41期）、

杉野健次海軍中尉，野元為輝海軍大尉（海軍兵学校第44期），大谷茂海軍主計大尉，岡野一幹海軍少佐（運用長，海軍兵学校第36期），川井田海軍軍医大尉（名は不明）の6名であった。ここで海軍兵学校の期別は，確認できる者だけを示した。

なお，本稿では海洋少年団員が便乗した船を「特務艦高崎」あるいは「高崎」と表記する。当時，雑誌などでは陸軍を含めた軍に所属する船を一律に「軍艦」と表記していたようである。本稿も特に必要の無い限り，それに倣うことにする<sup>4)</sup>。

## 2. 特務艦高崎に便乗した団員と航路

東京海洋少年団の団長は小山武海軍少将（退役）であった。彼が1925（大正14）年8月に同海洋少年団員と，おそらく神戸海洋少年団員を引率して，特務艦高崎に乗り込んだ<sup>5)</sup>。東京海洋少年団は1924（大正13）年12月に，神戸海洋少年団は1925（大正14）年6月に発足した，当時としては新しい子どもの組織であった。

当初の予定では，小山の他に補助の指導者3名，海洋少年団員26名からなる30名による便乗であった。高崎の乗り組み士官である中島武海軍大尉によると，団員はおおむね12,3歳から17,8歳であった。小山は便乗計画で，高崎に便乗中，海洋少年団員は以下の活動に取り組むこととした<sup>6)</sup>。

### 特務艦高崎乗艦中の日課

- a. 居室整備終て艦内見学，艦内に於ける心得，被服洗濯，体操，団歌
  - b. 航海術，機関室実地見学，講話，体操，結索，手旗，救急法，団歌
  - c. 発動機艇見学，結索，体操，手旗，救急法，団歌
- 備考
- 一，午前八時軍艦旗揚方終る迄は船員と同一の作業とす，艦内の服装は学校服を着用の事，
  - 二，艦の作業の都合に依り前後変更することあるべし

基本的には艦内の見学に加えて，海洋少年団としての訓練を行うことが予定された。ただ，朝は艦の兵員と同様の作業を行うこととした。館内の整理や清掃活動と言った作業を行ったのであろう。

計画によると東京海洋少年団からの参加者は1925（大正14）年7月29日に東京駅に集まり，汽車で名古屋に移動して伊勢神宮を参拝，そこから京都を経由して8月1日，宮津に到着する。天橋立を

見学した後，舞鶴に入る。この時までには，神戸海洋少年団員も合流したと思われる。高崎に乗り込むのは翌2日であり，4日には福岡の西戸崎に入港する。翌5日は香椎宮や宮崎宮に行き，6日は太宰府に向かう。その日は二日市に泊まり，翌日西戸崎に戻る。8日はボート練習などを行った後で高崎に便乗し，9日に出港する。横須賀港には12日に到着する。つまり，高崎に便乗するのは8月2日から4日，9日から12日である。

## 3. 海洋少年団への見方

ここでは，海軍士官が，海洋少年団員やその指導者をどのように受けとめていたのか検討する。具体的には，海洋少年団員の服装と敬礼，出身階層と意識，規律，そして指導者の態度についての所見を見ていくことにしたい<sup>7)</sup>。なお，原文は漢字と片仮名交じり文であるが，本稿では読みやすいように片仮名を平仮名に変換している。

### (1) 団員の服装と敬礼

海洋少年団員の制服は，海軍の水兵が着用していた服に倣っていた。高崎への便乗計画を海軍に提出した際，小山武は艦内での服装を学校服としていたが，実際には以下のように海洋少年団の制服を着用していたようである。

大日本海洋少年団と銘打ちたるペンデントを巻ける水兵帽を被り，浅黄色の中着襟をつけたる水兵上衣を着，赤き襟飾をつけ，半ズボンを穿き，青の長靴下に黒靴をはける

（中島武海軍大尉の所見）

全国の海洋少年団の草創期に設立された東京海洋少年団は，設立当初，団員に上記のような制服の着用を求めている。この後，全国各地で海洋少年団が設立されるに伴い，制服を購入するだけの資金的余裕のない団員や団では，普段着で活動していた<sup>8)</sup>。

海洋少年団を含めた少年団では，軍隊や警察などで行う，5本指による敬礼を採用していなかった。「拇指と小指とにしての輪を画き中の三本を揃へたる」（中島武海軍大尉の所見）敬礼だったのである。このいわゆる3指礼は，敬礼だけではなく。挙手をする際，あるいは指導者が団員の注目を集める際に，右腕をまっすぐ上に上げ，手は人差し指，中指，薬指の3本を，間を空けずに揃って伸ばし，親指と小指の先を合わせていたのである。このような3本指による敬礼について，「少年団独特の挙手注

目敬礼をなせるはいと可愛く見えたり」(中島武海軍大尉の所見)と記述していた。

## (2) 団員の出身階層と意識

東京海洋少年団のように都市部で結成された海洋少年団には、ある程度裕福な階層の子弟が入団していた<sup>9)</sup>。入団の際に制服やローブなどの備品を揃える必要があり、更に活動のための経費を支出することが求められていたからである。この点に関して、「談話を試みるに皆口快活、口際にしてよき家庭の人となりたるものと見え素直なるもの多し」(中島武海軍大尉の所見)との見方がある。「よき家庭」とは、ある程度以上の階層の家庭を意味しているであろう。

ここで指摘しなければならないのは、海洋少年団員は中島武海軍大尉の話だから、素直に聞いていたようだということである。中島は以下のようなエピソードを報告している。

一日神戸少年団員の某は水兵に対して  
「おいこら働けよ、今に士官になつて来て使つてやるから」  
と云ひたる由にて其の兵員は「子供の癖に生意気な」と痛く憤慨せる由なり  
(中島武海軍大尉の所見)

海洋少年団員の中には水兵などに対して、このような発言をする者がいたのである。このやりとりから、ある程度の階層出身の子どもが、自らの将来を海軍の中でも士官になることを想定していたようである。この発言を聞いた水兵が憤慨するのは当然であろう。中島は神戸海洋少年団員の発言としているが、東京海洋少年団員にも、同様の発言をした者がいたようである。

便乗中の子弟中東京の者は大部分有富の家庭に育ち居る関係上場摺れし居る故か兵員を頗使用する言動を見たる人あり従つて兵員の感情を害し居る模様なり  
(岡野一幹海軍少佐の所見)

裕福な家庭だからこそ、活動に経費がかかる海洋少年団に参加できていることが背景にあり、自分たちが海軍に入る際には、一水兵ではなく、士官としてであると考えたことによる言動であろう。この件に関し岡野は、「一考の価値あるものと認む」と述べ、海洋少年団員の意識についての問題を提起している。

## (3) 団員の規律

海洋少年団員の規律について、「尚充分と認めがたきものあり」(中島武海軍大尉の所見)との記述があった。中島は、「勿論少年団は軍隊にあらず故に之に対して軍隊の軍紀同様のものを要求するは酷なり」と述べつつも、「今少しの規律正しきことは願はしきことなり」と言う。ここで中島が、海洋少年団が軍隊ではないと明確に述べていることは指摘しておかなければならないだろう。海洋少年団はあくまで子どもの組織であり、軍隊ではないと海軍士官が認識しているのである。

中島の念頭には、海軍における規律があった。船を運用する際には上官の指示に絶対服従しなければならない。乗り組み員全員の命がかかっているからである。同様に、船内における整列や整理整頓も求められる。例えばとして、中島は具体的に以下のような少年団員の問題行動を指摘する。

例へば兵員と共に端艇撓漕をなせる時に少年団員の握れるオールは或は揚げたるままとなり、或は思い出したるが如く漕ぎ頗ぶる乱調子なりき、又作業の手伝に兵員を貸せる時も団員は多く袖手傍観し、兵員のみ作業せることありき少年団員中にも身長五尺八寸着水兵などもとても及ばぬ巨大漢あり、進んで作業すべかりしものと認む  
(中島武海軍大尉の所見)

少年団員が兵員と短艇(カッター)を漕いだとき、団員の行動が「乱調子」であること、兵員の作業を傍観する団員が多いことを指摘している。規律、上下関係、作業の援助など、海軍だけでなく組織の一人員としての行動が不十分であることの指摘である。

杉野健次海軍中尉も、「少年の意志を束縛するか如きは好ましからざるも」と前置きしながら、「家庭に在りては為すまじと思はるゝか如き不行儀のこと多々あり」と報告している。具体的に、少年団員の何が「不行儀」だったのかは詳らかではないものの、これまでに見てきた団員の船内での行動を踏まえての評価であろう。

## (4) 指導者の姿

この便乗を引率した東京海洋少年団の指導者には、小山団長と、指導者を務めていた嘉悦一郎がいた<sup>10)</sup>。これらの指導者について、高崎の乗り組み士官はどのように見ていたのであろうか。

中島武海軍大尉は指導者と団員の関係について、「団長小山少将の命令、指導者嘉悦先生の命令には皆尽く服従し又より懐けり」とみていた。更に中島

は、小山の団員に対する姿を次のように観察していた。

団長の団員に対する態度は誠に親切丁寧にして第三者として見る時も大に感動せざるを得ざりき殊に難航海中最年少者二名の船暈に苦しめる時の如き団長は終夜其の傍にありて何それとなく世話する様慈父と虽も之及ばざるものありき余程子供好きにて且つ親切心なければ出来ざることなり、少年団員の氏を慕ふこと慈父の如き又宜なりと云ふべし

(中島武海軍大尉の所見)

小山の団員に対する姿が、「誠に親切丁寧」であり、船酔いする団員の傍らにいる小山の姿を「慈父」あるいは「余程子供好き」と評し、「親切心」があると所見を述べている。退役したとはいえ、これが海軍少将の姿かと、驚きをもって観察していたようである。

一方で川井田軍医大尉は、海洋少年団に「軍隊的の厳粛味」を要求している。そのために、「便乗に際し引率者は今少しく、艦内生活中、艦の規律を順守せしむ」べきであるという。引率者が子どもに甘いことが子どもを勘違いさせ、勘違いした子どもが兵員に立場をわきまえない言動をするという連鎖を踏まえているのであろう。指導者が厳粛に、規律を順守して団員に接することで、「一般兵員への悪影響も少く海事思想普及の目的も達し得て効果ある」というのである。

岡野一幹海軍少佐は海洋少年団の小山や嘉悦に対し、指導者が個別行動を取るときはもちろん、同一行動を取るときも、相互に相談した上で、艦側に交渉してほしいと述べている。この件も、具体的にどのようなことを念頭に置いているのか詳らかではないが、これらの指導者がある程度、自由に団員を引率して行動していたのだろう。小山と嘉悦の間の打合せ不足も含めて指摘している。

#### (5) 海洋少年団への評価

ここでは、高崎の乗り組み士官が、海洋少年団の組織や活動に対してどのように評価していたのかを見ていくことにしたい。これらの士官が高崎便乗前までに、海洋少年団を実際に見たり聞いたりしていたという経験はほぼ皆無であったと考えられる。そのため、海洋少年団への評価も、高崎の中で見聞きしたことに基づいている。

例えば、杉野健次海軍中尉は、海洋少年団への評価について、次のように述べている。

海洋少年団は設立後日尚浅く未だ創造中の域を脱せざるを以て賞賛すへき処多きも不満足の点も亦尠からず

(杉野健次海軍中尉の所見)

もう1人、川井田軍医大尉の所見も引用しよう。

海洋少年団員の団体的訓練は創立後日尚時浅きにも拘らず予期以上に訓練され居る事は認めらるゝも此の種の訓練は一部の人に限極さるべきものに非ずして社会人としては何人にも必須のものなり。一步進み吾人のひそかに期する海洋少年団としては尚ほ満足の域に到達せりと云ふべからず

(川井田軍医大尉の所見)

杉野と川井田は共通して、海洋少年団が設立後間もないのにも関わらず、予想以上の訓練を行っていることについて肯定的に評価している。しかしながら、杉野は「不満点」が多いこと、あるいは川井田は満足の域に達していないと評価する。子どもを組織した団体であることは理解しつつも、なお一層の訓練を求めているのである。

川井田は海洋少年団の訓練が「社会人としては何人にも必須」であると述べていることも傾聴に値するだろう。海や船に関する知識や技術は、限られた人々だけに教示されるべきではなく、一般に広めるべきだという意見である。

また、中島武海軍大尉は次のように海洋少年団の存在を評価していた。

我が少年時代と比較し斯かる団体を組織し斯かる指導者の下に斯る旅行をなし得る現代少年は幸福なる哉の感を深げり

(中島武海軍大尉の所見)

海洋少年団という新しい組織や活動を見て、「元来少年を好める」という中島は、素直に「現代少年」が「幸福」だと評価したのであろう。中島は海洋少年団、あるいはその高崎便乗に対して様々な意見を述べているが、全体としてはその活動を肯定的に評価している。

#### 4. 特務艦高崎への便乗

次に、海洋少年団員が高崎に便乗したことに関する、乗り組み士官の所見を検討する。中島武海軍大尉によると、団員は高崎上において「総員起床より

午前八時までは全然兵員と同様の作業をなす筈なり」と言いつつ、「海上平穩なりし日本海の航海にも西戸崎に於ける碇泊中にも兵員と同時に総員起床せるは認めざりき」と苦言を呈する。中島としては、どうして海洋少年団員が兵員と同じ行動や作業をしないのかと疑問に思ったであろう。また引率者としての小山武も、団員がどの程度まで兵員の行動や作業に参加させるのかを迷っていたのかも知れない。

### (1) 海洋少年団員が高崎に便乗することの意義

中島武海軍大尉はこの便乗について、「訓練を主目的とせるにはあらゆるしならしも概して訓練は少なかりし様なりき」、「訓練と云はんより遊戯に偏するもの多かりし」と述べている。海軍としての軍隊が前提であるならば、子どもにそのことを求めること自体、無理があるかも知れない。少なくとも中島には、海洋少年団による高崎便乗が「遊戯」と映ったようである。

その一方で中島は、「日本海航海中の航海当直は海洋に関する知識を得る上に於て多大の効果あり」、あるいは豊後水道から紀伊沖に至る間、高崎が大きく揺れたことについて「年団員の初航海としては大に困難なりしならしも海上の経験としては甚だ可なり」とも述べている。これらの経験が、少年団員にとって有効であるとの評価である。遊戯として一蹴するのではなく、肯定的な側面を見いだそうとしていることが伺える。

岡野一幹海軍少佐は「便乗中本艦乗員は出来得る限り便宜を計り援助を与ふることに努力せり」というが、杉野健次海軍中尉は「少年団の行動に今回の如く船員の手を要すること大なるは感心せられず」という。このように言ってしまうと、どのような個人や組織であっても、軍艦に便乗することが難しくなってしまうのだが。

以下、高崎への便乗、物品の管理など具体的な観点で検討を行いたい。

### (2) 特務艦（運送艦）高崎への便乗

高崎は運送船だった。杉野健次海軍中尉は、艦船の行動計画や住居設備などの関係があって、他の軍艦へ長期間に渡って便乗することは難しいことに理解を示しつつも、特務艦に海洋少年団を便乗させることは「不適當」とであると指摘する。同様に、岡野一幹海軍少佐も次のように述べている。

少年団訓練の方針が強制的にあらすして「愉快と自発的及び自制に俟つと云う精神」には同意を表

するも其の訓練が初歩なる為規律を主とする艦船に長期便乗する場合には一考を要するものあり本艦の如きは居住設備商船式にして普通軍艦に便乗せると異なる感しを抱懐かしめ自然船客の気分になりはせぬかと思はる休暇等の関係ありて時機を得るに困難ならんも阿蘇の如き兩三日清水、沼津、等に行動する艦船に約二十名位便乗生活せしむれば艦務の妨害もせず通一遍のを祭騒にあらすして堅実なる普及と体験となる事を認む

(岡野一幹海軍少佐の所見)

高崎は居住設備が商船式なので、戦艦や巡洋艦などいわゆる軍艦への便乗とは事情が異なっている。便乗者が一般船の旅客のような気分になることを危惧するのである。そこで、例えば軍艦の一種である敷設艦阿蘇などに便乗し、東京から清水、沼津などに数日間、20名程度を便乗させると「堅実なる」海軍軍事思想の普及と、船や海そして海軍の体験が可能になると提案する。

### (3) 物品の管理

海洋少年団員が艦から借用した物品の管理を上手にできなかったことを、大谷茂海軍主計大尉や岡野一幹海軍少佐が指摘している。大谷は、「貸与諸物品に対する責任者を一層明確にせられたし」と指摘する。加えて、「蓋し年少者なる為物品に対する責任觀念に乏しきのみならず 艦船より連絡士官を出し物品等に付監督せしむることとするも少年団に対し監督するは不穩當にして且不充分なるを免れず」という。少年団員が責任觀念に乏しいので、士官に監督させることとするも、そのあり方について悩む姿が見て取れる。

また岡野も「各科の綬品を借用証を入れて貸与しても其の保管に不慣れの為めと訓練不足の為返却の際其の取纏に困却せり」と述べる。少年団員の、貸与物品に対する保管と返却の不慣れさに困惑している。

### (4) 特務艦高崎への便乗の評価

以上の問題はあるにしても、海洋少年団が広い意味での軍艦、あるいは高崎に便乗することには、好意的な意見があった。「海洋少年団便乗は其の趣意には賛成なり」（大谷茂海軍主計大尉）、「便乗し海軍思想の普及と体験の主旨は賛成にして有効と認む」（岡野一幹海軍少佐）という意見である。少年団員の物品管理に注文を付けていた大谷や岡野が、このように高崎への便乗を肯定的に評価しているのである。

## 5. 海洋少年団への提案

ここでは、高崎乗り組みの士官たちが海洋少年団の活動や組織について、いくつかの提案をしていることに着目したい。それは、団員の選定、年齢階梯、少年団における訓練、そして少年団員の将来に対する提案である。

### (1) 少年団員の選定

野元為輝海軍大尉は、高崎に乗り込んだ海洋少年団員が上流階級の子弟であると理解した。そこで、「団員の選定を更に広範とし人物本位として貧富により左右させること」として、以下のような議論を展開する。

今回の便乗は短時日、且つ一部の団員に限られたるか為偏見なき能はずと虽も団員は之れ皆富祐者の子弟その多くは年齢過少にして団員として自治の精神に基た欠乏せるを見る、これ固より少年団創立後日尚浅きと国民一般が海洋恐怖心未た去らざる今日団員父兄に対する顧慮とは彼等生来の屈託なき生活と相俟てその指導が迎合的に流し必然的に然らしめたるものなるべしと虽も現状を以てしては余りに貴族流の娯樂的行為に偏して終局の目的たる海洋的訓練に副はざること瞭遠なるもなり 一般国民に海事思想を普及せしめんとす 何ぞ団員を富裕者の子弟のみに限らんや 一ヶ月数回の行為等此迄経費を要せざるなり為は少数の上流社会の娯樂的行為にあらずして一般国民のために属す人物を本位とし更に広範囲より選抜したるものを一団として訓練してこそ長短相補ひ自から自啓自発的精神を助長し以て団として能率を増大すると共に各個人修養の一助と生り得へし

(野元為輝海軍大尉の所見)

現状では海洋少年団における指導が、海洋に「恐怖心」を持つ団員の父兄への「顧慮」と「生来の屈託なき生活」に対し「迎合的」で、「余りに貴族流の娯樂的行為」に偏っていると指摘し、「富裕者の子弟」のみに限定するのではなく、1か月あたり数回の活動には余り費用がかからないのだから、団員を「更に広範囲より選抜」して組織するべきだと提案するのである。

高崎に便乗した東京海洋少年団は団員を選抜して組織しており、ある程度の社会階層を背景に持つ子どもが集まったのであろう。しかし、地方の漁村には既に地域に存在していた子どもの集団をそのまま海洋少年団として組織した事例もある<sup>11)</sup>。

### (2) 少年団員の年齢

高崎に便乗した少年団員を見て、その年齢階梯のあり方に対する意見が提示された。それは、小学生と中学生の区別を設けるべきというものであった。例えば、杉野健次海軍中尉は「年少者（中学生以下）は不適當なり」と指摘する。「中学生以下」とは、厳密には中学生未満という意味であろう。その理由について、「年少者に対する顧慮為他の団員の行動を妨くることなきや」という。海洋少年団を海軍や軍艦が指導や訓練する際、小学生に対する配慮に手が取られるなどにより、中学生の行動に支障が出るというのである。

野元為輝海軍大尉は「団を単に海洋に親しむを目的とする少年部と訓練を目的とする青年部とに分つこと」と提案する。小学生からなる少年部と、中学生以上で組織する青年部は子どもの体力、活動の目的が違うはずだというのである。野元はこの点について以下のように述べている。

尋常六年の少年と中学五年の青年とはその体力学力思想上雲泥の差異あり之を全員一団として指導するも徒勞多くして功少きは贅言を要せず 過日航海御講話の實驗に徴するも明白なる事実なり 須く之を少年部青年部の二部に分つべし 過日土佐沖に於ける一兩日間の動揺は未訓練の彼等に対し悪宣伝とならざりしやを慮る余り若輩を駆て過度の訓練をなすは考え物なり 即ち少年部に於ては現今の如く只海洋に接して之か趣味の喚起に力む

その員数の如きは今日の如く小数に限定することなく更に大に拡張すべし之れ通俗の海事思想普及は団員の数に比例すべし之れ若き程度の訓練を経たるものはその体力、識量等の詮衝を経て青年部に送るべし 青年部に於ては徒に募集の迎合的にあらずして実地的訓練を主とすること現に神戸に存する他の海洋少年団の如くすべし かくて海洋に接して之が苦勞の半面を踏破してこそ初めて真の海洋的訓練を経たるものと称すべし

(野元為輝海軍大尉の所見)

小学生からなる少年部では海に関する「趣味の喚起」に主眼を置き、希望者を広く募る。その中で訓練を経た者を体力と識量などの選考を経て青年部に送る。中学生以上からなる青年部では、実地訓練を主とすべきであり、それは神戸にある海洋少年団などが実際に行っているとおりにするべきである。以上のように野元は提案する。

このように小学生年代と中学生年代を分けて指導することは、ボーイスカウトやシースカウトが英

国で始まった当初から導入されていた制度でもある。少年団や海洋少年団として受け入れた日本でも満8歳から12歳の「幼年健児」、満11歳から18歳の「少年健児」、満18歳以上の「青年健児」に区分しており、それに倣って海洋少年団では満11歳未満の「海洋幼年健児」、満11歳以上18歳未満の「海洋少年健児」、満17歳以上の「海洋青年健児」と区分していた。そして海洋少年健児を知識と技能の修得程度によって、「海洋見習健児」から「海洋二級健児」、「海洋一級健児」へと進級する制度を整備した。これらを総称して「進級制度」と呼んでいた<sup>12)</sup>。

### (3) 海洋少年団の訓練

海軍には士官、下士官、兵という区別があった。これらの違いはおおむね海軍の各種学校などにおいて受けた教育の程度に由来すると考えて良いだろう。例えば、海軍兵学校を出た場合と、そうでない場合では、その身分には大きな違いがあった。士官としての教育を受けたのか、それとも下士官や兵としての教育を受けたのかの違いである。そのことを意識して、中島武海軍大尉は次のような議論を展開する。

概して少年団員は既に士官となれるか又は士官同様の待遇を受くるを至当なりとの感を抱けるものの如かりき少年団員を教育するに兵学校生徒を教育するが如く、兵としての教育よりも士官としての教育に重きを於けるが故にあらざるか

(中島武海軍大尉の所見)

高崎に便乗した東京海洋少年団員がどのような訓練を受けているのか、士官としての訓練なのか、それとも兵としての訓練なのか、海軍大尉としての中島は興味を持っているのであろう。中島は海洋少年団の教育が士官を志向しているため、子どもたちの言動も兵ではなく、兵を指揮する立場にある士官の様になってしまっているのではないかと疑問を呈しているのである。軍隊という階級社会に生きる軍人にとって、自らが士官、下士官、兵のいずれかという問題、あるいは士官、下士官、兵のどの教育を受けたのかという問題は即ち、自分自身の位置づけを確認する問題にも直結していたのであろう。

また、杉野健次海軍中尉は、海洋少年団の教育方針である「愉快に遊び○(判読できない文字-引用者)智識を増進す」との言葉に言及しつつも、「団隊生活には更に幾層の自治精神を必要とす」と指摘する。海洋少年団という組織、あるいは海軍という

組織に身を置くのであれば、「自治」の精神を更に身に付ける必要があるというのである。

このことに関連して野元為輝海軍大尉は、「又自治的訓練の一助として教程修業者をして団員の直接指導教育補助の任に当らしむるも一法たらん」と提案する。ある程度の海や船に関する知識や技術を習得した者を組織運営の補助的な立場に立たせることを提案するのである。これは既に述べたが、海洋少年団に規定されている「進級制度」に基づく議論であろう。さらに野元は、団員として身に付けるべき知識や技術が充分になったとき、今度は団の活動を補助する立場に立たせるのも一考ではないかと提案する。

このしくみは、後に海洋少年団で導入される。東京海洋少年団の創設期に団員として入団した人物が、後に「隊付」あるいは「副長」として、団の活動を支えていた。

## 6. 海洋少年団から海軍への接続

高崎に便乗した海洋少年団員は、自らの将来についてどのように考えていたのであろうか。中島武海軍大尉は、団員の「将来は海軍士官になる、若しなれなければ船長になる」という発言を報告している。既に述べてきたとおり、東京海洋少年団はある程度以上の社会階層に属する選抜された子どもの集団であり、自らの将来を一兵員ではなく士官になることを想定していたようである。

但し、このことは東京海洋少年団員という特殊性があったとも考えられる。既に述べたように、漁村の子ども集団を海洋少年団として組織した場合は、皆が皆、海軍士官を志向していたとは考えにくい。

野元為輝海軍大尉は、海洋少年団の教育課程を修了した者に対して、「若干兵役上の恩恵を与ふること」を提案している。野元によるとそれは「自発的精神を助長」するためであり、自ら進んで知識や技術を身に付けるため、中学生程度の海洋少年団として身に付けるべき知識や技術を得た者を対象として、海軍で「人物詮衝の上若き兵役上の恩典を与ふること今後専門学校以上に於ける軍事教程修業者に準ずるの規程を設く」と言うのである。

このことは、海洋少年団と海軍の接続を考える上で重要な提案であろう。海洋少年団で優秀な成績を上げた者を海軍士官として優遇するという主旨である。海軍としては、優秀な人材を確保するための手段としてはありえるかもしれない。

しかし、これまでの先行研究あるいは海軍や少年団の史料を検討した結果、海洋少年団員が海軍を志

願した際に何らかの優遇措置がなされていた証拠は発見できていない<sup>13)</sup>。野元の提案は、自らを「海軍少年団」とは見えていなかった海洋少年団にとっても<sup>14)</sup>、海軍にとっても、実行されることはなかった可能性が大きい。

## 7. おわりに

設立後間もない海洋少年団員が特務艦に便乗することについて、本稿で議論してきた通り乗り組み士官が様々な議論を提出した。それらを踏まえても、「通俗的海軍思想普及には相当の効果を期し得へき」という野元為輝海軍大尉の意見は、他の士官も同意するところであろう。

本稿では、海洋少年団員が高崎に便乗したことを、当の高崎の乗り組み士官がどのように見ていたのかという視点で議論を進めた。それは「海軍軍事思想」の普及という海軍としてもメリットのためであり、海軍として世話や配慮が必要であるというデメリットを越える見込みがあるため受け入れたと考えられる。

高崎乗り組み士官たちは、実によく海洋少年団員やその指導者の様子を観察していた。団員の行動、服装、態度、それに応じる指導者の姿など、艦内での様子を克明にとらえ、軍艦便乗や海洋少年団のあり方に対する提言を行っている。海洋少年団という新しい子どもの組織を見聞きした経験がほとんどないままの所見だと考えられるが、都市部における海洋少年団の特徴でもある、ある程度の階層出身の子どもからなる「富裕者の子弟」の組織だという指摘など、的を射た内容も少なくなかった。

海洋少年団員が高崎に便乗したことに関しては、それが「訓練」なのか「遊戯」なのかという疑問を呈示している。海洋少年団の指導者としては、そのどちらか一方だけを主張することはせず、訓練と遊戯のバランスを取ることが求められていた<sup>15)</sup>。遊戯という側面について、海軍士官としては不満が残ったのであろう。その他、特に運送艦に便乗することへの疑問を呈する意見もあった。

海洋少年団に対する提案の中には、少年団員の選定方法や年齢階梯、訓練、海軍への接続に関する者があった。具体的には、都市部のある程度の階層の子どもに限ることなく、より広い範囲で団員を組織すること、小学生や中学生という年齢階梯に合わせて組織すること、士官としての訓練か兵としての訓練かの検討、そして海洋少年団で訓練を積んだ者に、兵役上の優遇を与えることも含まれていた。

以上のように、高崎乗り組み士官による海洋少年

団に関する所見は、当然、海洋少年団を中心に述べている。その一方で、海洋少年団を受け入れた海軍の態度については、次のような意見を提出していた。

本艦に便乗中、兵員も亦屢少年団員に接したるが、兵員中の或る者は乗組士官のニックネーム、批評等を洩れなく少年団員に話せるものの如く団員にして士官のニックネームを呼び彼是と批評せるを聞きたり、斯の如きは大に害ありしものに認む

(中島武海軍大尉の所見)

兵員のある者が士官のニックネームや批判を少年団員に吹聴していることを指摘している。従来の軍艦便乗が主に大人を対象とするものであり、海軍として海洋少年団のように子どもを便乗させる経験はほとんどなかった。海洋少年団を受け入れた兵員も、少年団員を喜ばせようとニックネームや批評を開示していたのであろう。

海洋少年団という海軍にとっては外部の組織に接する際、受け入れる側としても相応の受け入れ方針や指導体制の確立が、当時から求められていたのである。

- 1) 上平泰博・中島純・田中治彦『少年団の歴史』萌文社、1996年。田中治彦『少年団運動の成立と展開』九州大学出版会、1999年。圓入智仁『海洋少年団の組織と活動』九州大学出版会、2011年。
- 2) 陸軍の寺内寿一中将が第4師団長を務めていた際に少年団の敬礼に関して議論を提起するなど、少年団の活動に陸軍が口を出すことはあった。少年団が1929（昭和4）年に実施された教科総動員運動に参加したことも、その1つと考えることもできる。
- 3) 圓入、前掲書、159頁。
- 4) 1920（大正9）年4月1日海軍省達第37・39号では、次のように分類していた（吉川弘文館編集部編『近代史必携』吉川弘文館、2007年、350頁）。軍艦（戦艦、巡洋戦艦、巡洋艦、航空母艦、水雷母艦、敷設艦、海防艦、砲艦）と駆逐艦、潜水艦、水雷艦が艦艇。特務艦（工作艦、運送艦）と特務艇（敷設艇、掃海艇、潜水艦母艇）が特務艦艇。他に雑役船があった。
- 5) ここで神戸海洋少年団員の参加を「おそらく」と表現したのは、小山が当初海軍に提出した計画には、神戸海洋少年団の文字が見られなかったが、海軍士官の報告書にはその文字が見られ、東京海洋少年団とともに便乗していたと考えられるからである。なお、神戸では1921（大正10）年12月26日に、全国に先駆け



となる海洋少年団、神戸シースカウトが発足している。さらにこの便乗の直前、6月26日に神戸海洋少年団が発足した。おそらく前者が後者へと発展的に解散、発足したと思われる（圓入、前掲書、48頁）。だが神戸にあったこれらの海洋少年団の、具体的な活動記録は見できていない。

- 6) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C08051408800 (第31画像目から第38画像目)、大正14年・公文備考・巻37・艦船「便乗1 (11)」(防衛省防衛研究所)。
- 7) JACAR:C08051409500 (第42画像目から第57画像目)、大正14年・公文備考・巻38・艦船「便乗2 (3)」(防衛省防衛研究所)。JACAR:C08051409600 (第1画像目から第6画像目)、大正14年・公文備考・巻38・艦船「便乗2 (4)」(防衛省防衛研究所)。
- 8) 圓入、前掲書、111頁。
- 9) 圓入、同上、56頁。
- 10) このほかの指導者に関する記録は残っていない。
- 11) 圓入、前掲書、110-111頁。
- 12) 圓入、同上、81-98頁。
- 13) 圓入、同上、198-203頁。
- 14) 圓入、同上、185頁。
- 15) 圓入、同上、120頁。